

臨床心理学における「主体性」概念の捉え方に関する一考察

浅海, 健一郎
九州大学大学院人間環境学府

野島, 一彦
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/846>

出版情報：九州大学心理学研究. 2, pp.53-58, 2001-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



臨床心理学における「主体性」概念の捉え方 に関する一考察

浅海健一郎 九州大学大学院人間環境学府
野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

A examination on the concept of "Syutaisei" (self-direction) in the clinical psychology

Kenichiro Asami (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Kazuhiko Nojima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this paper is to exam the concept of "SYUTAISEI" (Self-direction) from the point of clinical psychology. Recently there have been a number of problems pertaining to children in school, such as school refusal or bullying. And as one of the reasons of their problems in children, "SYUTAISEI" or the ability to think by oneself and to act by oneself could be identified. The word "SYUTAISEI" has been used mainly in the field of philosophy, and it has been discussed with the problem of self for "SYUTAISEI". This also holds true in the field of psychology. In clinical psychology and its related fields, it has been said that "SYUTAISEI" is a key element in many psychological problems. The concept of "SYUTAISEI" was closely examined by using "SYUTAISEI Scale", which was constructed by the author, as a result, the structure of "SYUTAISEI" was suggested, along with the review of post studies. In the future study, it will be necessary to consider how the concept of "SYUTAISEI" could be practically applied in clinical work.

Keywords: SYUTAISEI (Self-direction), Clinical Psychology, Puberty

はじめに

近年、学校における子どもの大きな問題として、不登校、いじめなどの問題が大きく取り上げられている。それらの原因は一概には言えず、本人に起因する問題、親・先生との関係、友達との関係の在り方など、多方面に広がるが、本人に起因する問題の一つとしては、自分で考え、自分を主張する能力の低さが挙げられるのではないだろうか。自分のおかれた環境について、ただ一方的に流され、ついていっただけでなく、その時々自分の判断でじっくり考え、周囲との関係について、あるいは自分について考えることができれば、自分を見失って途方に暮れることは、少なくとも防げるのではないかと思われる。そのような自らの「主体性」の在り方が、重要ではないかと考え、その視点から筆者はいくつかの研究を行ってきた。(浅海, 1997, 1999, 2000)

本論文においては、その「主体性」を改めて、どのように捉えるのか、特に臨床心理学において、どのように取り上げるのかという点について、言葉の一般的な語源、心理学の中での使われ方の例、そして筆者自身の視点などを引きながら、臨床心理学における「主体性」概念についての考察を行うことを目的とする。

主体性の一般的な定義、語源、および用法

まず、字義的な意味として『広辞苑(第五版)』(新村出編, 1998)では次のように述べられている。

「主体＝(中略)主観と同じ意味で、認識し、行為し、評価する我をさすが、主観を主として認識主観の意味に用いる傾向があるので、個人性・実践性・身体性を強調するために、この訳語を用いるに至った。⇔客体→主観
主体的＝ある活動や思考などをなすとき、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場に置いて行うさま。「一に行動する。」

主体性＝主体的であること。また、そういう態度や性格であること。「一に欠ける」

以上に関連して、木村(1994)によれば哲学用語として用いられる、「主体」という言葉は、「主観」という言葉に対して、新たに訳出されたものである。そして、次のように述べている。「「主観」というのは、ラテン語の「ズブイェクトゥム」subjectumに由来する西洋語—とくにドイツ語の「ズブイェクト」—の訳語として日本語に入ってきたことばである。(中略)哲学用語としての「主観」の訳語がもっぱら用いられるのはカント以後のドイツ観念論哲学の枠組みの中でのことだと言っている。それは多様な経験を先験的形式によって統一する認識論

的自我を指している、「向こうへ置かれたもの」としての「客観」に対置される。ところが、同じドイツ語のズピェクトが、萌芽的にはヘーゲルに始まり、一方でキルケゴールとニーチェを経てハイデッガーとヤスパース、そしてフランスに渡ってサルトルとメルロ＝ポンティといった実存の哲学において、他方ではマルクスを經由した社会主義の思想において、それとは別の意味で使用されるようになった。つまりそれはもはや認識構造における認識者としての自我を指すのではなく、行為の場面における「行為主体」としての、つまり社会状況の中で実存し行動するエイジェントとしての自己を指すことになった。」

このように、「主体」・「主体的」・「主体性」という言葉は一般的な言葉でもありながら、専門的には哲学の中で触れられることが多く、その中では、「主観」という言葉に対比して、実践性を伴う言葉として用いられている。一般的にも主観的といえ、ものの見方のみを指すことが多いが、主体的といえ、主体的に行動するという言い方のように対象に関わっていく自己としての意味合いを含んでいる。広辞苑における意味も、哲学の流れから来た意味として、書かれていると思われる。さらに主体的の意味としては、さらに他によって導かれるのではなく、自らの純粋な立場で行うこととなっており、その中では、行為の主体という意味ならず、他によって導かれないといった、他者との関係性の問題についても触れられている。続く主体性の意味では、そういった態度や性格とも述べられており、主体性が自己の属性としての性質であるとの意味とも取れる。

主体性といった言葉は一般的にも広く使われる言葉であるため、日頃特に専門用語として取り扱われることは少ないと思われるが、哲学の中で「主観」に対する言葉としての「主体」を考えた場合は、やはり態度や行動の中で表現される、本人の属性であると捉えることが妥当であろう。主観性という言葉には、木村が主観性を「判断の対象から距離をとって、対象を向こう側に置いて、対象に巻き込まれない冷静な態度でこれを判断しようとする立場」とするように、対象への自己の関わりといったニュアンスはあまりないように感じられる。

一般的な用法の中での主体性は「主体性がない」「主体性に欠ける」といった使い方をされるが、その中では、自分の意見がない、自分から自発的に取り組んでいないといった行動場面での用法から、自分としての落ち着きがない、自己が不安定であるといった、静的な意味の中でも用いられる。

主体について

ここで、主体性の発現の元である、主体に関する考察として、田中(1996)は「認識しうるものは客体(object)

の連関に属し、そしてそれを認識する主体(subject)はその連関の外に存在することになっていよう。」としながらも、自らである主体を認識可能にする概念として、「運動的主体」・「認知的主体」・「再帰的主体」を挙げ、「再帰的主体」は、自らが認識できる主体であるとし、いわば主体としての自分を対象化することができるものとしてもみている。

田中はこの3つの次元の主体を、行動の自発性の3次元から導いている。それによると、運動的自発性とは、出生前後の新生児の行動、あるいは戦争災害下などのパニック状態で現れる行動の自発性、随意性を例と挙げている。これによると運動的自発性とは、本能的、あるいは反射的な、もっとも原初的な行動を指していると考えられる。これからすると、「運動的主体」とはもっとも基本的な、まさに活動を発現するところの主体であって、意識される以前の、基盤となる主体を指していると考えられる。また、この主体は、運動的自発性の中では原初的な行動として示されているように、主体を意識する、しないに関わらず、その存在とともに必然的に生じる主体であろう。日頃活動している際には意識されることのない、主体としての自己であり、それなしには自己の存在自体が成り立たない、身体といった実体を含む自己の基盤である。具体的には、日頃何かを考えたり、五感から情報を得たり、それに基づいて行動する主体である。仮にその主体が危ぶまれれば、それらの活動自体が成り立たなくなり、まさに「我を忘れる」状態になり、茫然とし、方向性を持った活動はなさないであろう。

また、認知的自発性とは、「当面する事態や事物から距離をとって、その事態を対象化して把握したり、また事物を正確に把握しようとしたりする行動」とし、知的な活動が含まれる行動としている。これによると、「認知的主体」とは「運動的主体」の上になり立つ、知的な認識者としての主体であろう。これを「運動的主体」との比較に置いて考えれば、「運動的主体」が存在とともに必然的に生じるのに対し、主体が一個の独立した存在として、他と切り離されて認識されることが必要であり、かつ主体そのものが認知する能力を持つことに特徴付けられる。具体的には目の前にリングが置かれていて、それをリングと認識し、さらに食べられるものであると理解する活動であり、そのリングは隣にあるボールとは、その外観には似たところがあっても、違う機能を持ったものであると認識できる主体である。従って、この主体の在り方によって、同じものを見たときにも違う感じ方をしたり、またある時には素晴らしいものだと思われるといったものが、全く価値のないものだと思われるといったことも起こり得るだろう。

そして、再帰的自発性とは、認知している自分自身をも、対象としてみる自発性としており、この発生には社

会的な要素が大きく関係していると思われるとしている。それからすると、「再帰的主体」とは以上2つの主体との比較に置いて、存在し、認知する主体からさらに、その主体を外から対象として認知する主体であると考えられる。その発生には社会的な要素が関係していると思われると記されているが、それは他者との関係性の中で、自らである主体を、他の客体と対比する必要性が生じるためであると思われる。そして、その発生は思春期頃からと田中はしている—いわゆる「自我の目覚め」と言われるものに当たる—が、存在し、認知する自らである主体が同時に、他とは違う存在としての主体であるという気づきであろう。これには同時に時間的な経過に伴う、自己の変化を追っていきける能力も伴っていると考えられ、過去の自己を対象と捉え、それと現在の自己とを比較することで、自己に対するより深い認識ができるといった活動も含まれるだろう。

さらに、「精神分析などの指摘する人格の3次元に、もしも妥当性があるのならば、その根拠はおそらくはここにあるのだと思われる」ともし、この3次元は多くの一般性を持ち得ることを示唆させている。

そして、最後に心理学における「主体」の認識について、「それを不可能として哲学へ委ねるという態度を、心理学は取り得ないこと、「主体」の認識は可能であるばかりか、むしろ心理学にとっては必要不可欠の前提である」と述べ、心理学における主体の関わり的重要性を述べている。

心理学・臨床心理学で取り上げられる主体性

次に臨床心理学で取り上げられる、主体性について触れてみると、「新版 心理学事典」(藤永保代表編, 1981)では、主体という言葉で以下のように取り上げられている。

「主体的自我(subjective self) = (中略) 1) 本人が自己の行動や意識的経験において、その主体として感知するもの。これはあらゆる自我や自己についての諸概念の基礎にあるもので、第1次的自我または基本的自我とみられる。主体的自我は対象として気づかれるのではなく、行動や意識経験の際に副次的に気づかれるが、その感知には明瞭な場合もあれば不明瞭なこともある。明瞭に感知されれば、自我意識 Ich-Bewusstsein となる。一般に、意識には主体的自我についての感知が伴うものである。多くの行動において、その主体としての自我が副次的に感知される。(中略) 主体的自我には次のような機能がある。1) 行動や心的活動の発動者として、経験全体を自分に属するものとそうでないものとに識別し、自我の発動によるものには責任を感じさせる。2) 自分の行動の経過を副次的に感知し、観察し、それに制御を加える。3) 理想をたて、自分にとって価値あるものを擁護し、自

己を批判し、目的達成や自己実現をはかる。4) 社会における個人の独自の創意的な行動の基盤となる。」

以上のように心理学事典においては、自我の在り方の一つとして主体性が触れられている。この中では、「主体的自我は対象として気づかれるのではなく」とあるように、自己からの対象としては認識されないが、「行動や意識経験の際に副次的に気づかれる」とあるように、その存在は行動する主体に伴って、意識されるものだとされている。これは田中の述べる「再帰的主体」ほど対象化されないものの、やはり気づかれるという点では田中の述べる主体論とも異なるものではないと考えられる。また、主体的自我の機能として4つ挙げられているが、順に内発的な行動の起源としてのものから、行動していく際の自己の活動、そして、社会的な自己としての行動へと拡がりを持たせている。これらの拡がりには田中の「運動的主体」、「認知的主体」、「再帰的主体」に依るものに、それぞれ対応付けることもできると考えられる。

また、精神病理学の立場から、木村(1994)は「主体的な主観性」に支えられた心の働きが私たちの自己の「主体性」を支えていると述べている。そして、その「主体的な主観性」が、「主体」とか「自己」といわれるものを支える、私たちの存在の基盤であるとしている。さらに、精神病理学で扱う「こころの病」は、自己が自己自身であることの病理、「自己の主体性の病理」だと言える」と述べている。特に、精神分裂病患者は、他人との関係の中で自己の主体性を主張する力が弱く、思春期に入り社会的対人関係の中での自己確立をする必要が強くなってくると、「他人との関係を自己のうちに統合する能力の弱さ」が問題化し、何らかの契機を元に発病に至るとしている。

この中では、主に精神分裂病者における主体性の問題として取り上げられているが、ここで述べられる「存在の基盤」としての「主体的な主観性」は、健康な一般人においても当てはめられると筆者は考える。精神分裂病者の中では「主体的な主観性」が「共通感覚」といわれる常識と、ずれが生じることで病理が現れているとされるが、正常人においても、一時的な緊張状態の中でずれが生じ、それがパニックなどとして現れることもあり、それが主体性の問題とも関係していくと思われる。病的な「主体性」の問題は、精神病理学に委ねるとしても、その延長線上で正常人における「主体性」を捉えることはできるであろうと筆者は考える。

また、臨床心理学の立場で、成瀬(1988)は実践的な臨床場面から、体験原理を提示し、体験を「主体者である自己が生きる努力をしている自己自身の只今現在の活動についての内的な実感という主観的現象的な事象」とし、主体者の体験を重視している。さらに臨床的な応用技法である動作法の中で、主体者が自己を十分にコントロー

ルできている状態を「主動感」と呼び、自体をよく理解する為の重要な要素としている。

この中では自体としてのからだの感覚を元にした「主動感」という言葉で、主体性の問題が扱われていると考えられる。からだと共にあるところが十分にコントロールできている感じ方として、「主動感」と表現されるのは、そうでない状態を表す「被動感」、「自動感」という言葉も含めて、興味深い。これは単に主体性の問題を、考えの中だけで取り扱うのではなく、実践の中で取り扱う方法として、臨床の中で応用する上で、意味深いものである。

筆者自身の体験と研究に基づく主体性の捉え方

ここで筆者自身の体験に基づく主体性の重要性について述べたいと思う。そもそも筆者が主体性のテーマに関心を持ったのは、日常での主に対人関係の中で、自分の意見を持ったり、主張したり、あるいは行動に移る際に、いかに他者に左右されているかという経験である。そのこと自体は取り立てて特別なことでなく、一般的なことだと思われるが、それが高じて他人に過度に依存的になってしまうことで、自分の意見さえ持たなくなってしまう状況もあった。そのことで、自分で下したはずの判断でありながら、どこか自分の意見ではないような、他者からの影響の大きさを感じずにはいられないこともあった。その感じは、絶えずあるわけではなかったが、そのような時、自分の「主体性」のなさを感じたのであった。このようなことは、他者を自分と違った存在として意識し始めた思春期から生じ始めたことであり、同時に自己についての意識が大きく現れるようになってからだと思われる。そして、自己の「主体性」の在り方が、自分を方向付け、自分を安定させることに大きな影響があると思うようになったのである。

以上のような体験に基づき、筆者は子どもの「主体性尺度」の作成を試みた。(浅海, 1999) この尺度は小学校5年生から中学校3年生の思春期に当たる子どもを対象として作成されたが、その根拠は自分の体験および、心理学で述べられる自己への気づきの始まりの時期として、「主体性」が意識され始める時期だと考えたからである。また、この時期が一般的に、身体的・心理的に大きな変化を伴う不安定な時期であり、心理的なものを原因とした問題行動が多発し始める時期でもあるからである。

尺度の内容は5つの因子に分かれるという結果が得られた。その5つとは、①積極的な行動、②自己決定力、③自己を方向付けるもの、④自己表現、⑤好奇心であった。また、その後の対象者を増やした調査より、それら5つは①積極的な自発的行動、②自己決定力、③自己表現の3つに集約されるという結果が得られた。項目とし

ては、①積極的な自発的行動は、「あなたは、やることを人に言われなくても時間や場所などを考えて自分から進みますか」、「あなたは、新しいことをどんどんやってみる気持ちがありますか」など、自発性を中心とした行動・態度に表れる内容である。②自己決定力は、「あなたは、自分が考え出したよい意見でも、みんなに反対されると、理由をよく調べないで、すぐ取り消してしまいますか」、「あなたは、やろうと思うことも、人からだめだとけなされると、すぐ自信がなくなってしまうか」など、他者に左右されることで自分の判断が揺らぐ内容であり、自己の決定に関する項目である。③の自己表現は、「あなたは、自分の考えを言うことができますか(発表だけでなく、文や絵や身体表現でも)」、「あなたは、自分の言葉で自分の考えをいえますか」など、言語的な表現を中心としながら、自分を外界に向けて表現する内容である。

また、主体性と適応感との関係性にも着目し、自尊感情・退避的傾向・学校関係の3つを適応感の尺度とし、主体性と適応感の関係を調査した結果から、主体性の高さや適応感の高さに有意な正の相関があることが示された。(浅海, 1997) この結果からも、筆者の体験に基づく、主体性の適応感と関わる重要さが、統計的検定による量的な側面からも確認されることとなった。特に内面的な適応感の指標とした「自尊感情」と高い相関があり、主体性は内面的な適応感と関係が深いことが示された。

以上の結果から、主体性には3つの側面があることが示唆され、態度・行動面での自発性と、自らの方向性を定める自己決定、そしてそれらを外界に向けて表現する力が主体性の成り立ちを考える上で重要な要素となると考えられる。これら3つの要素は、まず行動を起こすための、内発的なものである自発性が最初にあり、そこから、行動を起こす中での色々な課題解決のために必要な自己決定を行い、それらを自己の中にとどめておくだけでなく、外界に向けて表現するという対社会的な活動が、主体性には必要であると考えられる。それは自己の内から外へのという方向性とも受け取れるし、それぞれの側面から自己の主体性についての理解ができると考えられる。そして、これらの結果を踏まえて、主体性についてのより深い理解をしたいと考えている。

総合考察

以上、主体性について、その一般的な定義・語源から、心理学・臨床心理学の中における主体性の触れられ方、そして最後に筆者自身の研究を通じた捉え方を概観してきた。これまで「主体性」という言葉は、心理学の中で、専門用語として改めて使われることはなかったものの、主体とそれに関わる主体性の問題は、様々な形で表現され、その重要性について触れられている。客観性を重視

する自然科学などに対して、心理学は目に見える形で捉えることが難しく、方法論的に様々な工夫がこれまでなされているが、やはり観察者としての主体、あるいは主観を抜きにしては語れないだろう。特に臨床心理学では、臨床の場において、目の前にいるクライアントとの間での関係性が重要視され、関係性の中から生じる変化をとらえる学問であるから、セラピストあるいは、観察者としての主体の変化についての観察も必要である。

この点について、田中によって述べられている、3つの次元からの主体の捉え方は興味深く、精神分析などでも述べられる3つの次元と合わせて考えると、より一層の関心が広がる。従って、田中は3つの主体を自発性の3次元から導いているが、主体性にもその3つの次元は適用できるだろう。すなわち「運動的主体」として述べられている、身体を基盤とした自己の活動の発現を担う基盤としての「自己の存在の基盤としての主体性」。次に「認知的主体」として述べられている、対象を認識し行動する「認識し行動する自己の中での主体性」。そして、最後の「再帰的主体」として述べられている、社会との関わりの中で自らが対象となるようなく社会的自己としての主体性である。

なお、ここまで筆者は実際に活動を担う「主体」と、その属性であると考えられる「主体性」の区別をあまり明確にして述べていなかったが、「主体性」とは「主体」が他と関わっていく中で現れてくる、性質としての属性である。また、心理学・臨床心理学の中で重要視される、「主体」の問題は、純粹に対象を客観視し得ない、観察者・当事者の存在の重要性を示していると考えられる。そして、その属性である「主体性」は、「主体」の在り方に伴って生じる、外界に現れ「主体」や他者へ認知される性質であると考えられる。よって、3節に述べた「主体について」は、属性である「主体性」を表現する上での、「主体」の有様を述べ、上記にて、それぞれの有様による「主体性」を導いたのである。

そして、木村によって述べられている「主体性」は、その「自己の存在の基盤としての主体性」に当たると考えられる。それがなければ自己が成り立たないような、現実と正常な接点を持つための基盤、そういった次元での「主体性」である。従って、この「主体性」は一般人では、あって当たり前のものであるから、普段意識されることもないが、特別な危機状態の中で、自分が失われてしまうという感じの伴う状況下で、感じられるものだと考えられる。また、＜認識し行動する自己の中での主体性＞は、日常の会話の中でも語られる、一般的な意味での主体性に近く、「心理学事典」の中で「主体的自我」として触れられ、「行動や意識経験の際に副次的に気づかれる」「主体性」であると考えられる。この「主体性」も普段何気ない行動の中では気づかないが、何かことを

起こしたり、決定しなければいけないような時などには強く意識されると思われる。それから、＜社会的自己としての主体性＞は、自らが対象となるような、社会的関係の中で表現される際に現れる「主体性」だと考えられる。すなわち対人関係の中や、社会的立場の中で、個人のみで行動する場合ではない状況で、判断したり、行動する場合に必要な「主体性」である。これは現実とのやりとりの中で生じるものであり、個人としての意志を越えたところにあるものにも適用されると思われる。

そのような次元で述べることができると考えられる「主体性」であるが、臨床心理学における「主体性」が問われるのは、主に2番目の＜認識し行動する自己の中での主体性＞だと筆者は考える。もちろん、3つの主体性が個人の中で存在するが、＜自己の存在の基盤としての主体性＞は、あまりにも基本的なものであるので、心理学の臨床の場面で問題として大きく取り上げる必要があるならば、病的な領域に深く踏み込んでいると考えられるし、＜社会的自己としての主体性＞は、個人的な臨床の場面ではなく、集団での実社会の中で問題になってくるものだと思われる。

また、思春期に多発する問題の多くは他者にどう見られているか、他者にとって自分はどうかという問題であると思われるが、これも結局は、他者が自分をどう見ているかを自分が認識する問題であり、自分の認識の問題と考えられる。しかし、そのように主体性の問題も他者との関わりを通して表されるものであり、主体と他者との関係性の視点から主体性を捉えることも重要である。本論文においては、その他者性の問題については深く言及していないが、近年「intersubjectivity(間主観性あるいは間主体性)」という視点が大きく取り上げられているように、他者との関わりの中での自己を捉えることも必要である。

また、筆者の作成した、子どもの「主体性尺度」の内容にも従って、考察を進めると、「積極的自発的な行動」の因子は現実場面での行動を表すと同時に、その行動の元になる自発性を強調したものであり、行動の原点としての自発性が主体性を表す元であると考えられる。これをあえて、主体性の3次元と合わせて考察するならば、＜存在の基盤としての主体性＞に当てはめることができると考えられ、自発性が自己の主体性を支える原点だと考えられる。また、「自己決定力」は、自分が行動していく中で起こってくる、活動の上での判断・決定であり、＜認識し行動する自己の中での主体性＞の一つの現れだと考えられる。そして、「自己表現」は＜社会的自己としての主体性＞を、まさに表現するために必要なものであり、社会の中で他者と関わりながら、自己を主張するために重要なことである。もっとも、このような区分には多少の無理はあり、明確に対応付けられるものではない

いが、筆者の作成した尺度の中にも、3つの次元の主体性が含まれていると考えられる。

いずれにしても、以上の主体性に関する考察から得られた知見を、実際の臨床場面での見方の一つとして生かしていくことは意味があることだと考える。この論文の中で述べてきた主体性に関する考察は幾分、思弁的になった感もあるが、実感としての「主体性」として表現される言葉を、臨床の中で生かせる言葉として、取り上げる上で有用だと考えられる。従って、これからは、臨床の場面でいかに応用していけるか、その具体的な方法を探っていく必要があると考えている。

引用文献

- 浅海健一郎(1997) 子どもの主体性と適応感の関係に関する研究, 日本人間性心理学会第16回大会発表論文集, 84-85.
- 浅海健一郎(1999) 子どもの「主体性尺度」作成の試み, 人間性心理学研究, 17(2), 154-163.
- 浅海健一郎(2000) 子どもの主体性と適応感の関係についての縦断的研究, 日本人間性心理学会第19回大会発表論文集, 120-121.
- 藤永保代表編(1981) 新版 心理学事典, 平凡社.
- 木村 敏(1994) 心の病理を考える, 岩波書店.
- 成瀬悟策(1988) 自己コントロール法, 誠信書房.
- 新村出編(1998) 広辞苑 (第五版), 岩波書店.
- 田中一彦(1996) 主体と関係性の文化心理学序説, 学文社.